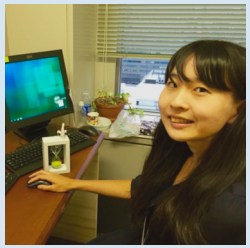
2015 年インターン生たちが語る
IMF OAP でインターンシップをするということ

国際通貨基金アジア太平洋地域事務所ではエコノミストと広報のインターンを毎年夏に募集しています。そこで、2015 年のインターンシップに参加した 3 人に、体験したこと、感じたこと、得たことについてざっくばらんに語り合ってもらいました。（国際通貨基金　以下 IMF；アジア太平洋地域事務所　以下 OAP）



明坂 弥香
エコノミスト
インターン

大阪大学大学院
経済学専攻
博士課程後期課程

ノア・タウク
エコノミスト
インターン

慶応義塾大学院
経済学専攻
博士課程 2 年

立川 七美
広報インターン

ロンドン大学(LSE)
社会政策学専攻
人口と開発
修士号取得見込み

みんなは何でそもそもインターンシップに応募しようと思ったの？

ノア:　経済政策にかかわる研究にもともと興味があって、IMF のような国際機関で働きたいと思っていたの。

七美：経済学は専門ではないけど、私も社会政策や国際機関に興味があって、実際どんな感じか体験してみたかった。

エコノミストインターンの役割は主に研究だよね？

弥香：そう。私は今、日本の高齢者の資産運用と労働供給について研究しているよ。インターンでは、リサーチ・クエスチョンやアプローチの仕方など、私の提案を上司であるエコノミストの方が尊重して下さって、やりがいがあった。

ノア：私は、OAP 次長の下、ワーキングペーパー（研究報告書）作成のために研究をしているの。研究内容は、日本の非伝統的金融政策がエマージング・アジア諸国に与えたスピルオーバー（波及）効果を研究しているの。Global VAR モデルを用いて、貿易、証券投資、直接投資のチャネルを通じたスピルオーバー効果を分析しているよ。

自分一人で全部やっているの？

ノア：自分のやり方で研究を進めさせてもらっているの。指導官に信頼されているってことだけど、責任が大きいよね。適切なモデルやデータを選択したり、データをモデルに合うように変えたりしたから大変だった。データが信頼できなかったり使用できなかったりと問題があったけど、文献を参考にしたり、IMF のエコノミストの意見を聞いたりしたよ。研究の重大な決断をするのは大変ではあるけど、おかげで以前より自立して自信を持って研究をできるようになったと思う。

七美：私は広報インターンとして、主に一般の方の IMF に対する理解やサポートを促すという役割を担っていたよ。例えば、一般の方向けのイベントの準備をお手伝いしたり、IMF についてのパンフレットを作ったりした。

ノア：パンフレット作りすごく頑張っていたこと、覚えているよ。

七美：うん、あれは大変だった！お台場で行われた、グローバルフェスタというイベントに出展して、私の作ったパンフレットを配ったの。実際、ブースに来てくださった方がパンフレットを手にとって、分かりやすいといってくれたのがすごく嬉しかった。OAP の広報インターンとしてやりがいがあるのは、毎年、インターンは必ずパンフレットなどを製作して、それがずっと使われるということなんだ。実際、そのイベントで配った IMF グッズも去年の広報インターンが企画・作成したものなの。

IMF での研究は博士課程の研究とどこか違うの？

弥香：研究のやり方自体に大きな違いはなかったけど、指導官との距離が近いことで、迷った時に気軽に相談できるのが良かった。OAP のオフィスでは、ミーティング等がない限りドアを開けたままだったから、OAP に来た初日はそれに抵抗があったけど、こうして気軽に相談したり質問したりしやすい環境作りがされているのだな、と後になって納得したの。それと、普段の私の研究では、アカデミックでの貢献が何かをまず考えて、次に政策的インプリケーションを考えることが多いのだけど、IMF のプロジェクトは政策が第一にあって、それにどうアプローチしていくか、ということが問われるので、いつもとは違う脳みその使い方をしたように思うかな。

エコノミストインターンをやるにあたって、何か必要なスキルはある？

ノア：基本的に、経済理論の知識はここでのインターンシップで役立つよね。でも、統計ソフトウェアのプログラミングやコーディングの知識もあるほうがいいかもしれない。研究の時間を節約したり、早く計算したりするのに役立つと思う。

インターンを始める前、不安だった？

ノア：私個人の研究では、実証分析を用いているから、インターンシップを始めたときは、私の経済理論的背景が IMF でのプロジェクトには不十分ではないかと思っていたの。でも後で気づいたんだけど、一番大切なことは研究に興味を持っていて、コミットしているかということなんだと思う。もしかしたら、知らないトピックが研究題材になる場合もあるかもしれない。そんなときに、十分な知識がなくても、新しいことを学ぼうとする姿勢で補うことができるはず。

インターンシップを通じて得たことは？

弥香：自分の研究について、労働経済のバックグラウンドを持たない人に対して分かりやすく説明するにはどうしたらいいか、ということを今までより強く意識するようになったかな。普段、大学院の研究室や学術会議では、トピックを理解している人が大部分のため、自分の研究の社会的な意義を説明する機会は多くはなかったので。一方、IMF では、別の分野を専門とするエコノミストに、自分のリサーチを一から説明することが多くあったの。自分の研究の社会的・学術的意義を第三者の目から考える機会と、説明をするために自分の理解を確認し直す、いい経験になったと思う。

七美：私は、このインターンシップを通じて、国際機関で働くという経験を得ただけではなく、広報とはどういう仕事なのかということへの理解が深まった。私の上司は素晴らしい方で、貴重な経験や知識を共有してくれたの。おかげで、資料を読む人にメッセージを効果的に伝えるというスキルが身についたかな。どの分野にも応用が利いてかつ必要不可欠なスキルだと思うから、インターンシップをしてよかったと思っているよ。

インターンシップをしてよかったことは？

弥香：IMF のエコノミストやスタッフの方とランチをしたり休憩時間にお話したりするのが楽しみだった。大学では、職員の方とご飯をご一緒させて頂く機会がなかなか無いので新鮮に感じたのと、スタッフの方のバックグラウンドが多様で話を聞かせて頂くのがとても面白かったな。IMF ではスタッフ同士がとてもフランクなのが、私には過ごしやすかった。

ノア：会議や打ち合わせにも参加できて、IMF がどのように動いているかを知れたことかな。もちろん、エコノミストとお話をして学べたことはすごくよかった。

七美：私も OAP でロールモデルになるような方々にお会いできて本当にありがたかった。広報チーム以外のスタッフの方々も、仕事と私生活に関してのアドバイスを下さって、いつも励ましを送って下さったの。あと、二人といい友達になれてよかった。お互いの将来の夢や目標を語り合う中で、私も自分が情熱を持っている分野で頑張りたいなって思うことができた。

二人の目標が何だったかをまた話してもらえる？

弥香：ずっと研究が続けられたら嬉しいなぁ…と思って、研究を頑張っているよ。今回のインターンに参加したことで自信がついたから、今までより挑戦してみようって思えるようになった気がする。

ノア：IMF や国連のような政策決定に関わる研究機関で働くことを目指しているの。研究を通じて、世界の国々や地域、特に私の出身の中東においての経済の安定化に貢献したいと思っている。

七美：私は、中・低所得国でのリプロダクティブヘルス（生殖に関する健康）に貢献したい。今秋から、東京で経営コンサルティングのアナリストとして働くよ。将来的には、コンサルティングで培った分析能力と大学院で研究した分野の知識をベースとして、グローバルヘルスの政策立案に携われたらいいなと思っているよ。

じゃあ、最後に真面目な質問なんだけど、来年インターンを応募される方に伝えたいことってある？

ノア：特定のスキルを持っていなかったとしても、それにストレスを感じないでほしいですね。それより、研究に対する決意と意欲を持って、自分の最善を尽くすことが大切だと思います。意欲を高く維持しながら、空いている時間に、自分があまり経験のない分野についての文献を読むことをお勧めします。

弥香：学校で進めている自分の研究もあるだろうから、2 ヶ月もインターンに参加するのは抵抗があると思いますが、絶対に後悔することは無いのでぜひ参加してみて下さい。勤務時間は 9 時～17 時なので、朝や仕事終わりに自分の研究をする時間も結構取ることができました。

七美：OAP のスタッフの方々のお話を伺って、グローバルに働くこととはどういうことなのかということを深く考えることができました。このインターンシップを通して、自分のキャリアの目標に向けて一歩大きく前進できました。私は IMF 以外の国際機関でも就業経験をしたことがあるのですが、機関によってカラーが違うことが分かりました。みなさんも機会があったら、複数の国際機関でインターンシップをやってみることをお勧めします。

本リポートは、立川七美が取材・執筆しました。

OAP からの景色